

内的体験は、事実とは限らない

— 生きていくためのエネルギー源とのアクセス —

岩 宮 恵 子*

Inner experiences are not necessarily facts

— Access to energy sources to survive —

Keiko Iwamiya

【キーワード：内的体験・記憶・ユング心理学】

私は二歳半の時、迷子になった。いや、迷子という言い方は正確ではない。家からひとりで出て歩き、数時間後に数キロ離れた場所で保護されたのである。

穏やかな夏の午後だった。お昼寝から目覚めたら、縁側で父が友人と碁を打っていた。「ママは？」と聞いたら、「お買い物だよ」と返ってきた。それなら私も出かけようと唐突に思ったのだ。家にいるのが苦痛だったとか、母を探しに行きたいというような理由でもあれば説明がしやすいのだが、まったくそういうことはなく、ただ「私は今からひとりで出かける」と思っただけだった。その時の気持ちは妙にクリアに覚えている。

幼児期の記憶は、自分の視点から見ているものではなく、自分の姿を俯瞰している映像として記憶されている場合が多い。私の記憶も、幼い私を空中のカメラから見つめているような映像イメージとして残っている。私は家を出て、ひたすら歩いた。やがて大きな橋のたもとにたどり着いたときに、幼児がひとりで見とがめた人から「おうちはどっち？」と聞かれた。来た方向を示したら橋が渡れなくなると思った私は、「あっち」と橋の向こう側を指さした。とにかく、橋が渡ってみたかったのだ。

その人が通報してくれたおかげで、私は御用となった。実はこの頃、2,3歳の幼児の誘拐殺人事件が全国的に何件か続けて起こっていた。そんななかで私が行方不明になったため、すわ誘拐かと緊張が走り、駅には私服刑事が張り込み、幹線道路では検問がされるなど、ものすごい大騒ぎになっていたらしい。

さて、問題はここからだ。私の記憶と親の話が食い違うのである。私の記憶では、保護されてから家に帰るまでの間に裁判所に寄ったことになっている。しかも普通の裁判所ではない。両開きのアーチ型の大きな扉がギーッとという重々しい音と共に開かれ、空気が違う場所に入っていったのだ。私は父に片腕抱っこされ、横に母がいるのを確かめながら、その場所を見渡した。そこは大きな体育館くらいのとても広い大法廷だった。パイプオルガンのような石造りの柱がずらっとそのまわりの壁を囲んでいる。ドーム型の天井には天窓がついていた。初めて見る荘厳な場所だった。そして厳粛な空気の中かで裁きが行われていた。正面の壁から光が差しているので人物の姿はシルエットでしか見えないが、罪を犯した人と裁く人とが同じ場所で向かいあっていた。その時、「罪を犯すと、こうやって裁かれる」という声を聴いた。男の人の声だった。そうか、そうなんだと、その言葉をそのままに私は受け取った。とても公正な印象があり、厳しさは感じたが、恐ろしくはなかった。

のちにこの迷子(家出?)事件を話題にすると、親はその都度、詳しくその時の事実経過を話してくれた。それに加えてどれほど心配したか、どうして私が出て行くのに気づかなかったかと父親のぼんやりを母親がとがめたことや、多くの人たちに助けてもらったこと、そして警察から連絡があったとき、安堵してどれだけ泣いたかなど、雨降って地固まるといったドラマチックな家族の絆の貴重な思い出話になっていた。

しかし私にとっては、裁判所のことが最も大事な関心事だった。なので「あのすごい裁判所はど

*島根大学人間科学部

こにあったの？」とこの話題を出すたびに必ず訊ねるのだが、「裁判所に寄ったりしないよ。何かのドラマか本で読んだこととごっちゃになって勘違いしてるんだよ」と親はいつも微笑んでいた。確かに私の記憶にある大法廷は、うちの近所に実在する地方裁判所のものではない。ヨーロッパにある歴史的建造物のようだ。それに、なぜ二歳半の私が「裁かれる」という言葉の意味を理解できたのかもわからなかった。幼い私の記憶よりも、親の記憶のほうが確かなのは間違いない。しかも両親ともに同じことを言うのだから、それはもう揺るぎのない事実と違いない。こんなにもクリアで確かな記憶なのに事実と違うのは何故なのかと、私はずっと不思議でたまらなかった。

心理学に興味をもったのも、こういう体験が影響した部分もあったと思う。やがて大学生になってからの心理学の授業で「内的体験は事実とは限らない」ということを知ったときは、まさに目から鱗が落ちる思いだった。そうか。私のあの記憶は内的体験だったのだ。でも、だとしたらどうして裁判所なんだろう。フロイトの理論でいくと良心を内在化していると言われて「超自我」ってことなのかな。家出をして親に心配をかけたことで罪悪感に襲われたから、裁判所で裁かれるイメージが出てきたんだろうか・・・などと個人的なことと関係づけて考えたりしていたが、今ひとつピンとこなかった。

やがてユング心理学に触れたときに「自分が存在していることを感じ始める頃の子どもは、人類すべてに通じるくらい深い無意識の内容を感じとっていることがある」という考えを知った。この言葉に出会ってからは、この内的体験を個人的な問題に無理に還元しなくてもいいのかもしれないと思うようになった。そして「幼い子どもたちは、神話的な内容を意識しているが、もしこの内容があまりにも長期間意識に留まると、その子どもは根元的なヴィジョンに留まっていたいとか、そこへ戻りたいといった絶え間のない憧れに取りつかれてしまう」というユングの言葉にも膝を打った。

実は私は四歳の時に、どちらが先にジャングルジムのでっぺんに登れるかという競争を雨の日に男子たちとして、足が滑って真逆さまに落ち、肋骨と腕を複雑骨折し、三ヶ月間幼稚園を休んだことがある。身体を動かすのが大好きな（と見えていた）子が、胴も腕もギブスに包まれて動けなくなったのだ。しかし、ほんとうは、ずっと家に居て絵本を見たり、自由に想像の世界にのめり込めたりするのがとっても嬉しかったあの気持ちとありありと覚えている。

どこかでは、雨の日にジャングルジムを駆け上

がるような無茶をすると、怪我をする危険があることがわかっていた気がする。幼稚園児の私は、社交的な雰囲気でも元気に適応していたようだが、実はあの二歳半の記憶が示している根元的なヴィジョンに留まっていたいという憧れが強かったのだと思う。そのため不注意による怪我の形をとって、どっぷりと内向することを叶えてしまった部分もあったかもしれない。

現代は、効率とか成果とかが何よりも重視されている。それはある意味、当然だし仕方がないのだが、あまりに一面的な価値観に世界が支配されると、まるで世界全体のバランスをとるかのよう、無意識に直結するような内的体験に重心を移して、現実から距離をとろうとする子どもや若いひとたちも増えているように思う。

その内的体験が肯定的な形でこの世とリンクできると、新しい感動をこの世に及ぼすような素晴らしいムーヴメントになっていく。そういう子どもや若者がいるのも確かだ。アーティストの作品やパフォーマンスに触れるときに受け取る喜びのなかに、それを感じる。しかし心理療法の現場には、内的体験とこの世とのリンクの方法が見つからない人たちが訪れてくる。それはなかなか解決の道を見つけることが困難な、さまざまなこの世でのテーマを背負った人たちだ。

そんなひとたちが少しでも自分らしい人生を送れるようになればと、日々、こころとそだちの相談センターで心理療法に取り組んできた。そんななかで、彼らが自分なりの方法で社会との接点を見出していけるようになるためには、逆説的なようだが、一度、思いっきり内向して、自分自身の内的体験としっかり結びつくことの必要性を感じることもある。そうじゃないと、外に向かうためのエネルギーの源泉にアクセス出来ないのである。

未だに二歳半のときの内的体験は私を捉えて離さない。ふとした瞬間に、橋を渡ろうとしていたときの空気の感じや、ヨーロッパの大聖堂のような大法廷に響く声や、荘厳な石造りのイメージをトレースしてほおとしている自分にはと気づくことがある。きつこの内的体験は、私にとってこの世に生まれてきた意味にもつながるような大切な記憶なのだろう。そしてその内的体験は、生きていくエネルギーの源泉にもなっている。

みんな、忙しい日々を送っているとまったく忘れ去っているが、実は心の奥底に、生きていくためのエネルギーと不思議な回路でつながっている貴重な内的体験をもっている。相談者の人とともに、そのひとだけの大切な記憶が存在しているその場所にアクセスできるような心理療法をこれからも続けていきたいと思っている。